http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/

We 35R

No.366　14/05/22

ウサギは何みてはねる

　都会でマンション暮らしをする人が増えたせいか、そういう人でも集合住宅で飼うことのできるペットととして「ウサギ」の人気が高まってるそうだ。へ～え。テレビでも有名な「うさんぽ会」なるウサギ愛好家のオフ会まであるそうだ。

　ウサギは結構我々の生活に根付いている。君たちがウサギといって思い出すものは何だろう？　ウサギとカメの話？　有名どころではミッフィー（ブルーナー）がいるし、サンリオのキャラクターにはマイメロディというのもいるそうだ。さらに、あ～と思い出すのがビアトリクス・ポター（石井桃子訳）の「ピーターラビット」。実はこの話、原作のイギリス以外で最初に翻訳が出されたのは、実は日本なのだそうである。明治39年「日本農業雑誌」に松川二郎なる人物が翻訳していて、それが世界で最も早い翻訳だというのだから驚きである。（大東文化大学の河野芳英教授らの研究グループが2007年に発表）

＊

　ウサギで思い出すのはなんといっても「月」であろう。「うさぎ」という童謡は誰でも知っていて、

　うさぎ　うさぎ　　なに見てはねる
　十五夜お月さま　　見てはねる

であるが、私たちは満月の月の中にウサギが餅をついている姿を昔から幻視してきた。そして、古来「ウサギが月の中に住む」とか「月のウサギは餅をつく」といった言説に囲まれて成長してきた。

　この話の出典は何かというと、紀元前四～三世紀中国の屈原（「楚辞」で有名）の著書『天問』だといわれている。また、仏教説話には「老夫に身を隠した帝釈天が、狐と猿と兎に食物を乞うたところ、猿と狐はすぐさま食べ物を差し出したが、兎は名にも差し出すことができなかったので、自らの肉を食べてほしいと火中に身を投じた。すると老夫は帝釈天の姿に戻って火を鎮め、兎を憐れんだ帝釈天はその亡骸を運び、月の中に納めた」と語られているそうだ。いわゆる「ジャータカ（本生譚）」といわれるもので、『今昔物語集』にも翻案されている。（ちなみに、生き返らせてやらないのは、ちょっと可哀想だなと私は思いますが…）

　その中国では、月のウサギは不死という概念と結びついて「仙薬」を搗いているともいわれるそうだが、どうして日本では「餅」なのだろう？　ヒントは、やはり「月」ということに関係する。月関係の言葉をいろいろ思い浮かべてみると、そこに「餅」と関連する言葉が見つかるのである。

　答えは「望月」、つまり満月。在野の民俗学者として有名な吉野裕子先生が提唱されている説であるが、昔は農業はもちろんのこと漁労や畑作といった生業の中で、月は時間や天候を知る大きな手がかりとなっていたし、作柄や狩猟の良否を占うものとしても大きな存在感を持っていた（例えば、「聖＝日知り」に対して「月読＝月読み」など）。

＊

　かわいらしいウサギであるが、研究してみるとさまざまな表情をもっていることが分かる。学問の世界は奥深い。

（今橋理子『兎とかたちの日本文化』東京大学出版会、2013を参考にして書きました）